

各部部長及び
若手アカデミー報告資料

第一部報告
第186回総会
2022年12月8日、21日

第一部役員
部長：橋本伸也
副部長：溝端佐登史
幹事：日比谷潤子
幹事：吉田 文

第一部の組織
分野別委員会（10）・分科会（79）

分野別委員会	分科会数
言語・文学委員会	4
哲学委員会	5
心理学・教育学委員会	13
社会学委員会	9
史学委員会	10
地域研究委員会	9
法学委員会	9
政治学委員会	5
経済学委員会	6
経営学委員会	5
第一部直接統括	4

第一部の運営体制

- 部会：年3回を予定
- 役員打ち合わせ：随時
- 拡大役員会：部会の間に1-2回、必要に応じて開催（部役員+分野別委員長）
- 第一部が直接統括する分科会
 - ①国際協力分科会
 - ②人文・社会科学の役割とその振興に関する分科会
 - ③人文・社会科学基礎データ分科会
 - ④総合ジェンダー分科会

第25期の方針（第二回部会〔4月21-22日〕で確認）

- ① 会員任命問題の解決をめざして四役、幹事会、第二部、第三部との強固な連携のもとで粘り強い働きかけを継続します。
- ② 改正科学技術・イノベーション基本法、第6期基本計画のもとでの人文・社会科学の振興策についての審議・具体化を進めます。
- ③ 「日本学術会議のより良い役割発揮」をめぐる議論について、部の特性を生かしながら積極的に参画します。
- ④ 部における分野別委員会・分科会体制及び科学的助言活動のあり方についての検討を進めます。

4月総会以降の活動（骨子）

- ▶ 会員任命問題への取り組み：部役員が幹事会等において必要な取り組みに参画、当事者への対応
- ▶ 「意思の表出」に向けた体制構築（部及び分野別委員会における査読体制）と実行
- ▶ 多彩なシンポジウム等の開催（2022年4-2022年12月に学術フォーラム2件、公開シンポジウム16件）
- ▶ 夏季部会について

「意思の表出」に向けた第一部内の体制構築と実行

- ▶ 基本的考え方：①新たな「意思の表出」の仕組みを踏まえた分野別委員会の抜本的な機能強化、②部における査読等の体制の再構築
- ▶ 11月末時点での「意思の表出」申し出の現況：合計21件
- ▶ 申出書提出までの手順：分科会等から分野別委員会へ申し出→分野部委員会による意見作成→分野別委員会から分科会へ意見の伝達→分科会等による申出書の修正→分科会等から事務局（第一部担当）を通じて第一部へ申し出→部役員による意見の作成→部から事務局を通じて分科会及び分野別委員会へ伝達
- ▶ 部による意見作成上の観点：過去の関連する提言等との関連、分科会・分野別委員会の枠を超えた課題の共有の可能性、連絡会議等学術会議内の諸組織への貢献可能性、名宛人の明確化、ステークホルダーとの対話の広がりなど

学術フォーラム・公開シンポジウムの事例から

▶学術フォーラム

「地球規模のリスクに立ち向かう地域研究 ウクライナ危機に多角的に迫る」(12月10日予定)

「コロナ禍を共に生きる#8 コロナパンデミックが顕在化させた「働くこと」の諸課題は人口問題にどう影響するか？」(9月2日)

▶公開シンポジウム(16件)

ウクライナ戦争関連(2件)、各委員会・分科会の特質に応じた多彩な企画

夏季部会(8月22日)について

▶会員任命問題について

▶日本学術会議のあり方について

▶ウクライナ戦争によって日本のアカデミアに提起された諸問題について

▶役員交代：小林傳司幹事→吉田文幹事(10月1日付け)

▶その他

第二部活動報告

令和4（2022）年4月～令和4（2022）年11月

第二部役員

部長：武田 洋幸
副部長：丹下 健
幹事：尾崎 紀夫
幹事：神田 玲子

1

組織及び活動の概要

第二部は現会員70名、下記の9委員会※1のもとに91分科会+2小委員会が設けられており、各分野に特徴ある活発な活動を展開している。部会は4月総会時および夏季の計2回開催され、役員会は幹事会の開催日に合わせて行われており、部の運営方針を決定している。

分野別委員会	委員長	分科会数
部附置分科会	※2	3（+小委員会1）
基礎生物学委員会	小林 武彦	15
統合生物学委員会	北島 薫	7
農学委員会	仁科 弘重	14
食料科学委員会	熊谷 日登美	9
基礎医学委員会	松田 道行	11
臨床医学委員会	名越 澄子	14（+小委員会1）
健康・生活科学委員会	小松 浩子	8
歯学委員会	市川 哲雄	3
薬学委員会	山崎 真巳	7

※1 環境学委員会は分野別委員会ではあるが、融合領域分野として第一部～第三部の会員から構成されているため、9委員会には含めていない。

※2 第二部が直接統括する分野別委員会合同分科会として以下を設置。

○第二部生命科学ジェンダー・ダイバーシティ分科会（委員長：熊谷 日登美）（前期からの継続）

○第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会（委員長：秋葉 澄伯）（前期からの継続）

○着床前診断、特にPGT-MIに関する検討分科会（委員長：藤井 知行）（第322回幹事会承認 令和4年2月24日）

2

第二部会、第二部拡大役員会の開催

◇第二部部会：第5回（令和4年4月18日、4月19日）
議題等：会員任命問題、未来の学術振興構想、会員選考方針について、委員会・分科会等の活動報告等

第6回（令和4年8月20日）
議題等：学術会議をめぐる情勢、26期の会員選考に向けて分科会等の報告等

◇第二部拡大役員会（第二部役員＋分野別委員会委員長）
第4回（令和4年6月17日）
議題等：補欠の会員候補者の推薦について

3

第二部が直接統括する分科会 #1

◆ 第二部生命科学ジェンダー・ダイバーシティ分科会

● 設置目的：生命科学分野の大学・研究機関・学協会におけるジェンダー・ダイバーシティに関わる現状を把握し、女性研究者、障害を持った研究者や外国人の研究者が活躍できるようにするにはどうすれば良いかについて検討を行う。

● 審議事項：

1. 生命科学分野の大学・研究機関・学協会における女性活躍推進のための方策の検討
2. 生命科学分野におけるダイバーシティ推進に向けた方策に係る審議に関すること

委員長：熊谷 日登美（第二部会員）

● 令和4年5月23日に第5回、11月11日に第6回分科会を開催

連続公開シンポジウム「生命科学分野におけるジェンダー・ダイバーシティ」の内容を取りまとめ、その記録を作成中である。学協会における男女共同参画のあり方に関する検討小委員会を設置し、自然科学系の協力学術団体（約1350団体）の男女共同参画の実態を調査している。

4

第二部が直接統括する分科会 #2

◆ 第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会

- 設置目的: 大規模感染症等を予防・制圧するために必要な体制の整備等についての現実的な提言に向けた検討を行う
- 審議事項: 国民の健康・福祉の脅威となりうる感染症に関して以下の検討を行う
 1. 過去および将来の感染症流行による公衆衛生上の危機の検討
 2. 感染症流行予防に必要な組織とその連携
 3. 国民の健康・福祉の脅威となりうる感染症流行に迅速・適切に対応するために必要な組織との連携
 4. 感染症を制圧するために必要な組織とその連携
 5. 感染症予防・制圧体制に必要な国際連携と協働
 6. その他、第二部幹事会が必要と考える感染症流行に関する事項に係る審議に関すること

委員長: 秋葉 澄伯(連携会員)

- これまでに19回の分科会を開催
(令和4年4/26、6/21、8/23、11/23)
新型コロナウイルス感染症対策の現場で活動されている方々等に講演していただき、議論を進めている。
意思の表出に向けて準備を進めている。

5

第二部が直接統括する分科会 #3

◆ 着床前診断、特にPGT-Mに関する検討分科会

- 設置目的: 着床前診断-Preimplantation Genetic Testing(PGT)、特にPreimplantation Genetic Testing for Monogenic(PGT-M:重篤な遺伝性疾患を対象とした検査)は、遺伝性疾患を有する当事者とその家族の想いを尊重すべきだという意見がある一方、遺伝子による選別、産み分けなど優生思想、差別にも繋がり得るとの観点から慎重な実施を望む意見も根強いが、現在その規制は日本産婦人科学会の「見解」による自主規制のみである。技術的進歩により比較的簡便に実施することが可能な状況になっており、またPGT-Mに対する社会の考え方も変化している中で、規制の実効性を担保する国の指針等による方向性の明確化を強く求める指摘もある。上記の状況を踏まえ、この問題について、日本学術会議において、臨床、生命倫理、法学、情報管理を含む委員会を組織し、医学会連合や関連する学協会など関係機関との連携の上で審議を進めたい。すなわち、諸外国における規制動向や議論を踏まえつつ、わが国においてさらに実効性を担保する規制を行うことの要否やその際の課題などについて検討を行う。
- 審議事項:
 1. PGT-M実施に対し、国による規制を加えることの要否
 2. PGT-M実施に何らかの規制を加えるとした場合、規制の作成および運用を、どのような方法で行うのが、もっとも実効性があり、かつ妥当であるのか。

委員長: 藤井 知行(第二部会員)

- 令和4年5月30日に第2回、9月7日に第3回、11月7日に第4回分科会を開催
- 学術フォーラム「ヒトゲノム編集と着床前遺伝学的検査について考える - 新しい医療技術の利用のあり方」を課題別委員会ヒトゲノム編集技術のガバナンスと基礎研究・臨床応用に関する委員会とともに開催した(2022年11月26日)。
- 意思の表出に向けて準備を進めている。

6

関連学協会との連携

- 学術会議幹事会は、記者会見を毎月開催して社会に対して情報発信するとともに、会員・連携会員や協力学術研究団体に記者会見内容をメール配信してきた。第二部では、学協会連合体に対して記者会見内容の通知を行ってきた。

第二部が連携している学協会連合

生物科学学会連合、脳科学関連学会連合、一般社団法人日本農学会、公益財団法人農学会、日本医学会連合、全国公衆衛生関連学協会連絡協議会、一般社団法人日本歯科医学会連合、日本薬学会、水産・海洋科学研究連絡協議会

- 第二部が中心となって新型コロナウイルス感染症に関する学術フォーラムをシリーズで開催することを第二部役員会で決定し、日本医学会連合と共同で開催した。

学術フォーラム

・「コロナ禍を共に生きる#7 新型コロナウイルス感染症のレジストリ研究の現状と今後の方向性 医療情報の収集と活用による対策について」 令和4年5月28日(土)

・「コロナ禍を共に生きる#8 コロナパンデミックが顕在化させた「働くこと」の諸課題は人口問題にどう影響するか？」 令和4年9月2日(金)

シンポジウム等(開催済) #1 (令和4年4月～令和4年11月)

第二部においては、令和4年4月から令和4年11月の期間中、31件の公開シンポジウム等を開催した。

開催日	名称	開催場所	委員会・分科会
令和4年 4月23日(土)	口腔に関連した新型コロナ感染症の諸問題	福岡国際会議場	歯学委員会
5月5日(木)	中等教育からはじめよう！ジェンダー平等 —誰一人取り残さない、誰もが暮らしやすい社会の実現をめざして—	オンライン開催	総合ジェンダー分科会、生命科学ジェンダー・ダイバーシティ分科会、理工学ジェンダー・ダイバーシティ分科会、科学者委員会男女共同参画分科会
5月21日(土)	ポストコロナ時代に求められる看護系人材	オンライン開催	健康・生活科学委員会、健康・生活科学委員会看護学分科会
5月28日(土)	コロナ禍を共に生きる#7 新型コロナウイルス感染症のレジストリ研究の現状と今後の方向性 医療情報の収集と活用による対策について	オンライン開催	日本学術会議
6月11日(土)	栄養と栄養補助食品に関する公益社団法人日本栄養・食糧学会、韓国食品栄養科学会、日本学術会議合同シンポジウム	武庫川女子大学/オンライン開催	食料科学委員会・農学委員会・健康・生活科学委員会合同IUNS分科会
7月7日(木)	地球の未来を切り拓く—育種学の役割—	オンライン開催	農学委員会育種学分科会
7月23日(土)	運動器疼痛に対する本邦の診療研究体制整備	オンライン開催	臨床医学委員会慢性疼痛分科会
7月23日(土)	事故による子どもの傷害を予防する—子ども中心の新たな予防システムの構築へ	オンライン開催	臨床医学委員会・心理学・教育学委員会・健康・生活科学委員会・環境学委員会・土木工学・建築学委員会合同子どもの成育環境分科会
7月30日(土)	高齢者の健康・生活の視点から新型コロナ感染症対策に求められる老年学の役割と発揮	オンライン開催	健康・生活科学委員会高齢者の健康分科会、臨床医学委員会老化分科会
8月5日(金)	地球の未来を切り拓く—育種学の役割—(第2回)	オンライン開催	農学委員会育種学分科会

シンポジウム等(開催済) #2 (令和4年4月～令和4年11月)

開催日	名称	開催場所	委員会・分科会
8月18日(木)	微生物や微生物菌叢への革新的機能付与・機能制御の新展開	オンライン開催	食料科学委員会・農学委員会合同農芸化学分科会
8月27日(土)	神経科学領域の倫理的課題	オンライン開催	基礎医学委員会神経科学分科会、基礎医学委員会・臨床医学委員会合同アディクション分科会、臨床医学委員会脳とこころ分科会、移植・再生医療分科会
9月1日(木)	地球の未来を切り拓く―育種学の役割―(第3回)	オンライン開催	農学委員会育種学分科会
9月2日(金)	学術フォーラム コロナ禍を共に生きる#8 コロナパンデミックが顕在化させた「働くこと」の諸課題は人口問題にどう影響するか?	オンライン開催	日本学術会議
9月3日(土)	法獣医学の世界	オンライン開催	食料科学委員会・農学委員会合同食の安全分科会、食料科学委員会獣医学分科会
9月17日(土)	口腔と全身のネットワーク～脈管系から生命現象を理解する～	徳島大学・大塚講堂大ホール	歯学委員会基礎系歯学分科会
9月25日(日)	DNA親子鑑定の実用化がもたらす家族観のゆらぎと法的・社会的課題	オンライン開催	臨床医学委員会臨床ゲノム医学分科会
9月29日(木)	東南アジアのアブラヤシ農園の持続的開発の問題点と課題	オンライン開催	農学委員会農業生産環境工学分科会、環境学委員会環境科学分科会
10月1日(土)	患者と医療者が協創するがん医療を目指して	パシフィコ横浜・会議センター5階「503」(第14会場)+WEB配信	臨床医学委員会腫瘍分科会
10月8日(土)	食の安全と社会:科学者の社会への伝え方	オンライン開催	食料科学委員会・農学委員会合同食の安全分科会、食料科学委員会獣医学分科会

9

シンポジウム等(開催済) #3 (令和4年4月～令和4年11月)

開催日	名称	開催場所	委員会・分科会
11月12日(土)	動物のワクチン～家畜を中心に～	オンライン開催	食料科学委員会・農学委員会合同食の安全分科会、食料科学委員会獣医学分科会
11月15日(火)	異なるモダリティを統合するバイオ計測の最前線と展望	日本学術会議講堂(東京都港区六本木7-22-34)(ハイブリッド開催)	基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同生物物理学分科会、基礎生物学委員会・統合生物学委員会・農学委員会・基礎医学委員会・薬学委員会・情報学委員会合同バイオインフォマティクス分科会、オープンサイエンスを推進するデータ基盤とその利活用に関する検討委員会、基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同IUPAB分科会
11月15日(火)	施設園芸のグリーン化に向けた課題と展望	オンライン開催	農学委員会農業生産環境工学分科会、食料科学委員会・農学委員会合同農業情報システム学分科会
11月19日(土)	東日本大震災に係る食料問題フォーラム2022―原子力災害11年の総括と福島県農林水産業の復興―	双葉町産業交流センター(福島県双葉郡双葉町中野高田1番地1)(ハイブリッド開催)	農学委員会・食料科学委員会合同東日本大震災に係る食料問題分科会
11月19日(土)	人類学者と語る人間の「ちがひ」と差別	オンライン開催	統合生物学委員会自然人類学分科会、地域研究委員会文化人類学分科会、地域研究委員会多文化共生分科会
11月20日(日)	気候変動時代における市町村による新たな森林管理とゾーニング	オンライン開催	農学委員会林学分科会
11月21日(月)	新興医療評価技術の適格性認定システムの構築とその課題	東京大学医科学研究所講堂(1号館1階) Webinarによるハイブリッド開催	薬学委員会・政治学委員会・基礎医学委員会・総合工学委員会・機械工学委員会・材料工学委員会合同先端医療技術の社会実装ガバナンスの課題検討分科会
11月25日(金)	水産からカーボンニュートラルの未来を展望する	オンライン開催	食料科学委員会水産学分科会
11月26日(土)	21世紀の新しい人材育成に向け薬学教育はどこへ向かうのか?	オンライン開催	薬学委員会化学・物理系薬学分科会、薬学教育分科会

10

シンポジウム等(開催済) #4 (令和4年4月~令和4年11月)

開催日	名称	開催場所	委員会・分科会
11月26日(土)	学術フォーラム ヒトゲノム編集と着床前遺伝学的検査について考えるー新しい医療技術の利用のあり方	オンライン開催	日本学会議
11月29日(火)	植物科学からサステイナブルな農業生産・ものづくりへ	オンライン開催	食料科学委員会・農学委員会合同農芸化学分科会、日本学会議基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同植物科学分科会

第三部報告

令和4年4月～11月

第三部部会 4/18,19(前々回総会中), 8/16,17(夏季部会)

第三部拡大役員会 5/25, *6/29, 7/27, 9/28, 10/24, 11/28

* 分野別委員会委員長も参加

部長	吉村 忍
副部長	米田 雅子
幹事	沖 大幹
幹事	北川 尚美

1

1. 第三部における分野別委員会

	委員長	副委員長
環境学委員会 *	浅見 真理	池邊 このみ
数理科学委員会	小澤 徹	齋藤 政彦
物理学委員会	野尻 美保子	腰原 伸也
地球惑星科学委員会	田近 英一	佐竹 健治
情報学委員会	相澤 清晴	谷口 倫一郎
化学委員会	茶谷 直人	北川 尚美
総合工学委員会	小山田 耕二	玉田 薫
機械工学委員会	大島 まり	金子 真
電気電子工学委員会	中野 義昭	中川 聡子
土木工学・建築学委員会	小林 潔司	田辺 新一
材料工学委員会	山口 周	乾 晴行

* 第一部～第三部合同

11分野別委員会のもとに80分科会が設置され活動

1. 第三部の附置分科会

理工学ジェンダー・ダイバーシティ分科会

委員長 野尻 美保子

副委員長 伊藤 貴之

参考 第25期の第三部も深く関わる課題別委員会

「[防災減災](#)学術連携委員会」

「[自動運転](#)の社会実装と次世代モビリティによる社会デザイン検討委員会」

「[オープンサイエンス](#)を推進するデータ基盤とその利活用に関する検討委員会」

「[学術情報のデジタルトランスフォーメーション](#)を推進する学術情報の基盤形成に関する検討委員会」

「[フューチャー・アース](#)の推進と連携に関する委員会」

「我が国の学術の発展・[研究力強化](#)に関する検討委員会」

3

1. 第三部の附置分科会

参考 第25期の第三部も深く関わる委員会等連絡会議

「[カーボンニュートラル\(ネットゼロ\)](#)に関する連絡会議」

「[パンデミックと社会](#)に関する連絡会議」

「持続可能な発展のための[国際基礎科学年2022 \(IYBSSD2022\)](#) 連絡会議」

2. 令和4年4月～11月の活動

(1) 第三部会での議論(4/18,19, 8/16,17)

- 会員選考方針について意見交換
- 2022年度第三部予算執行方針について説明の上、承認
- 会員任命問題について意見交換
- 未来の学術振興構想について説明及び意見交換
意見例・科学技術だけでは社会課題は解決できないので、一緒にやるのが望ましい。そのような観点での提案を出すよいのではないか。
- 研究力強化について説明及び意見交換
意見例・COE的組織に裁量権を認めて集中的に研究資金を配分するのも一考ではないか
・日本の研究力向上にあたって外国人を排除するのは得策ではないのではないか
・若手支援は重要であるが、過度な集中がより生じやすい可能性もある
- 委員会等の活動報告
- その他

(2) 拡大役員会での議論(5/25, *6/29, 7/27, 9/28, 10/24, 11/28 * 分野別委員会委員長も参加)

- 第三部夏季部会について議題及び進行状況確認、意見交換
- 第三部内の予算執行について状況を確認した上で、協力事項を確認
- 臨時総会について意見交換
- その他

5

3. 学術フォーラム開催

「リスク認知と教育」(R4.5.7)

環境学委員会・健康・生活科学委員会合同環境リスク分科会
【オンライン開催】

「持続可能な社会を創り担うための教育と学習のチャレンジ」(R4.6.5)

フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会【オンライン開催】

「国難級災害を乗り越えるためのレジリエンス確保のあり方」(R4.7.7)

土木工学・建築学委員会IRDR分科会【オンライン開催】

「国際基礎科学年～持続可能な世界のために」(R4.7.29)

持続可能な発展のための国際基礎科学年2022(IYBSSD2022)連絡会議
【ハイブリッド開催(日本学術会議講堂、オンライン)】

3. 学術フォーラム開催

「地球環境課題への挑戦に結びつける超学際研究」(R4.10.9)
フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会
【ハイブリッド開催(日本学術会議講堂、オンライン)】

「安心感への多面的アプローチ」(R4.11.5)
総合工学委員会・機械工学委員会合同工学システムに関する安全・安心・リスク検討分科会
【オンライン開催】

7

4. 公開シンポジウム開催

「自然災害を取り巻く環境はどう変化してきたか」(R4.5.9)
防災減災学術連携委員会【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

「2022年国際光デー記念シンポジウム～中堅・若手研究者が語る光科学技術の未来～」(R4.5.10)
総合工学委員会ICO分科会【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

「チバニアン、学術的意義とその社会的重要性」(R4.5.24)
地球惑星科学委員会IUGS分科会
【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

「第34回環境工学連合講演会」(R4.5.31)
土木工学・建築学委員会【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

「活動的縁辺域における洋上風力開発に向けて」(R4.6.3)
総合工学委員会エネルギーと科学技術に関する分科会、地球惑星科学委員会IUGS分科会【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

4. 公開シンポジウム開催

分子科学研究所所長招聘会議「日本の人材育成を考える」(R4.6.7)
化学委員会【岡崎コンファレンスセンター(ハイブリッド開催)】

「安全工学シンポジウム2022」(R4.6.29～7.1)
総合工学委員会・機械工学委員会合同工学システムに関する安全・安心・
リスク検討分科会【オンライン開催】

「医工学シンポジウム2022」(我が国の医工学ー現在と未来ー)(R4.7.23)
機械工学委員会・基礎医学委員会・電気電子工学委員会・材料工学委
員会合同生体医工学分科会、材料工学委員会バイオマテリアル分科会
【オンライン開催】

「誰もが夢を追求できるアバター共生社会の実現を目指して」(R4.7.26)
情報学委員会ICTの生む諸課題検討分科会【オンライン開催】

9

4. 公開シンポジウム開催

「みんなで考えるカーボンニュートラルと化学」(R4.7.30)
化学委員会・総合工学委員会・材料工学委員会合同触媒化学・化学工
学分科会、環境学委員会環境科学分科会
【早稲田大学西早稲田キャンパス63号館2階01・02教室(ハイブリッド開催)】

「越境しあうインフラガバナンスー性能とサービスをつなぐー」(R4.8.10)
土木工学・建築学委員会インフラ高度化分科会
【日本学術会議大会議室(ハイブリッド開催)】

「地球環境の未来を考える～カーボンニュートラルの実現に向けて」(R4.8.16)
第三部、北海道地区会議【北海道大学学術交流会館(ハイブリッド開催)】

「沿岸環境の変化と人間活動ー10年後を見据えた課題と対応ー」(R4.9.23)
地球惑星科学委員会地球・人間圏分科会、地球惑星科学委員会SCOR
分科会【オンライン開催】

4. 公開シンポジウム開催

「国際ガラス年2022記念シンポジウム」(R4.9.30)

化学委員会無機化学分科会、化学委員会材料化学分科会
【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

「日本の物理学研究－過去・現在・未来－」(R4.10.1)

物理学委員会・総合工学委員会合同IUPAP分科会【オンライン開催】

「21世紀前半に発生が確実視される国難級災害を乗り越えるためのレジリエンス確保のあり方」(R4.10.22)

土木工学・建築学委員会IRDR分科会
【JICA関西2階ブリーフィング室セッションシアター(ハイブリッド開催)】

「自然災害を取り巻く環境の変化－防災科学の果たす役割－」(R4.10.22)

防災減災学術連携委員会【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

11

4. 公開シンポジウム開催

「日本の社会・産業をリードする化学系博士人材とは～産学で取り組む博士人材育成と、これから博士を目指す学生への期待～」(R4.11.5)

化学委員会、化学委員会企画分科会
【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

「私たちの地球はどんな惑星か－科学を混ぜて地球を探る」(R4.11.5)

持続可能な発展のための国際基礎科学年(IYBSSD)連絡会議、地球惑星科学委員会
【テレコムセンター1階大ステージ(ハイブリッド開催)】

「カーボンニュートラル化と資源循環に向けた高分子化学のチャレンジ」(R4.11.8)

化学委員会高分子化学分科会【日本学術会議講堂】

「URSI日本生誕100周年記念シンポジウム1922-2022－日本の電波科学研究の発展並びにURSI日本の歩み－」(R4.11.12)

電気電子工学委員会URSI分科会【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

16

12

4. 公開シンポジウム開催

「なぜSDGs? ~資源・材料循環におけるSDGsとカーボンニュートラル~」
(R4.11.18)

材料工学委員会・環境学委員会・総合工学委員会合同SDGsのための資源・材料の循環使用検討分科会
【東京大学生産研究所An棟2階コンベンションホール(ハイブリッド開催)】

「物理学のアプローチが開く世界とその展開」(R4.11.20)

物理学委員会【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

「SDGsと結晶学」(R4.11.27)

化学委員会・物理学委員会合同結晶学分科会、化学委員会IUCr分科会
【関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスB号館】

13

5. 理学・工学系学協会連絡協議会

令和4年3月24日 10:00~12:00 WEB開催

- 「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」、「日本学術会議と国内の学協会連合等との連携に関する調査報告書」について説明
- カーボンニュートラルに関する連絡会議、持続可能な発展のための国際基礎科学年2022連絡会議について説明
- 参加した学協会と次の事項について意見交換を実施
カーボンニュートラル、研究力強化等

理学・工学系学協会連絡協議会(82学協会)
日本学術会議第三部役員会のもとに、理学・工学系の学協会との連携を強め、双方の活動をさらに発展させるために、科学・技術、学協会、日本学術会議等に関わる課題について意見交換する場として設置。多くの学協会に共通する課題(新公益法人制度、学術論文誌の出版、若手・人材育成、財政等)、科学・技術全般に跨る課題、学協会から日本学術会議への意見・要望等について、情報交換・意見交換を行ってきた。

- 第1回 平成22年4月23日(金)13:30~15:30
- 第2回 平成23年7月29日(金)13:30~15:30
- 第3回 平成24年5月18日(金)14:00~16:00
- 第4回 平成25年2月22日(金)10:00~12:00
- 第5回 平成26年6月25日(水)13:30~15:00
- 第6回 平成28年6月24日(金)10:00~12:00
- 第7回 平成29年8月31日(木)10:00~12:00
- 第8回 平成30年3月30日(金)10:00~12:00
- 第9回 平成31年3月28日(木)10:00~12:00
- 第10回 令和2年8月26日(水)10:00~12:00
- 第11回 令和2年10月30日(金)13:00~15:20
- 第12回 令和3年6月24日(木)10:00~12:00
- 第13回 令和4年3月24日(木)10:00~12:00

17

14

第25期日本学術会議 若手アカデミー活動報告 (2022.4-2022.11)



第25期若手アカデミー

日本学術会議若手アカデミー (Young Academy of Japan) は、人文・社会科学と自然科学にまたがる多様な分野にわたる、45歳未満の研究者をメンバーとしています。

第25期全体委員数：50名
(うち特任連携会員：7名)

全体会議 2021年11月30日、12月10日、2022年9月6日
運営分科会 2021年12月16日、2021年1月21日、2月22日、
9月1日 3月23日 2022年11月28日

8つの分科会 (具体的な活動を担う)

- 学術の未来を担う人材育成分科会 (12名)
- 学術界の業界体質改善分科会 (5名)
- 越境する若手科学者分科会 (19名)
- 国際分科会 (11名)
- 地域活性化に向けた社会連携分科会 (14名)
- イノベーションに向けた社会連携分科会 (12名)
- 情報発信分科会 (11名)
- GYA 総会国内組織分科会 (14名)

*GYA総会後に分科会も終了



全体会議スクリーンショット

第25期若手アカデミー運営分科会メンバー

幹事団



代表
岩崎 渉



副代表
安田仁奈



幹事
小野 悠



幹事
松中学

各分科会 委員長



国際分科会
入江直樹



GYA 総会
国内組織分科会
新福洋子



学術界の業界体質
改善分科会
川口慎介



地域活性化に向けた
社会連携分科会
加藤千尋



学術の未来を担う
人材育成分科会
平田佐智子



越境する若手科学者
分科会
石川麻乃



情報発信分科会
高田知実



イノベーションに向けた
社会連携分科会
高瀬堅吉

若手アカデミー分科会活動状況 (1/2)

分科会名	活動目的・内容	状況
地域活性化に向けた社会連携分科会	現在国内外の社会経済状況が大きく変化する中、科学と地域社会との関係性が問い直されている。社会課題の解決に科学の知識や手法が有効であるだけでなく、科学する場としての地域社会、科学への市民の参加が見直されている。地域社会における科学者の役割を幅広く検討し、多様な主体との対話を重ねることで、科学と地域社会の持続的な関係性を再定義し、実現方策を検討する。	第1回 R3 1月19日 R3 3月1日公開ワークショップ「若手科学者が拓く地域と科学の関係」 第2回 R3 6月2日 第3回 R3 12月10日 第4回 R4 3月25日 第5回 R4 8月23日
学術界の業界体質改善分科会	研究従事時間の減少とそれ以外の業務の増加が指摘されるなか、研究に集中できる環境整備と健全なライフ・ワーク・バランスの確立は、重要な課題である。学会活動にかかる時間的負担やその他の慣例的な業務負担など、学術界の様々な「業界体質」を可視化し、その改善に向けた調査・議論を進める。	第1回 R3 2月12日 第2回 R3 11月22日 第3回 R4 9月20日 第4回 R5 (1月予定)
イノベーションに向けた社会連携分科会	第25期若手アカデミービジョン・ミッションを共有し、「イノベーション」の概念整理に着手している。現時点で優先すべきイノベーション、イノベーションを起こすために必要なもの、イノベーションを阻むものについて議論する。今後、シンポジウムをし、広く市民との意見交換の場を持つとともに、関係団体と意見交換を行い、議論の内容を意思の表出へとつなげる。	第1回 R3 2月22日 第2回 R3 4月16日 第3回 R3 11月16日 第4回 R3 12月10日 第5回 R4 1月18日 第6回 R4 3月23日 第7回 R4 5月30日
情報発信分科会	若手アカデミーの活動を促進し、その有効性を高めるために、情報発信の媒体や方法を議論し、実践する。国内のアカデミアとその周辺に限定せず幅広い利害関係者をステークホルダーと捉え、若手アカデミーに関する理解や認識を得ながら対話し、双方向的なコミュニケーション活動を目指す。	第1回 R3 4月15日 第2回 R3 7月12日 第3回 R3 12月10日

若手アカデミー分科会活動状況 (2/2)

分科会名	活動目的・内容	状況
学術の未来を担う人材育成分科会	大学院において専門教育を受けた多様な人材を活かすべく、高等教育が担う教養教育・専門教育の社会的価値を多角的に評価するための調査・議論を進める。また、大学院生が効果的な教育を受け研究に専心できる環境を構築するための調査・議論や精神的・経済的な環境に対して支援する枠組みのあり方について検討をおこなう。	第1回 R3 2月17日 第2回 R3 11月22日 第3回 R3 12月10日 第3回 R4 11月22日
越境する若手科学者分科会	幅広い専門分野を持つ若手科学者間の研究交流を図り、既存の発想にとられない科学分野間の融合によって革新的な研究展開が生じうる新規領域やそれらが生む未来社会のビジョンの提案、新しいテクノロジー等を用いた市民との交流の実践を行う。	第1回 R3 2月26日 研究交流会5回 第2回 R3 5月18日 第3回 R3 12月10日 第4回 R4 10月26日
GYA 総会国内組織分科会	国際的若手学術組織であるグローバルヤングアカデミー(GYA)と共に、科学技術の未来や世界規模の社会課題の解決を考えるGYA総会兼学会を日本でする。GYA共同代表、執行役員およびメンバーで構成される企画組織委員会と連携し、企画内容および登壇者の提案や国内的な準備を行い、かつ若手アカデミー以外の若手研究者や若手以外の研究者、行政官、産業界、一般市民も参加できる議論の場を設定できるよう連絡調整を行う。	第1回 R3 1月21日 第2回 R3 3月12日 第3回 R3 6月17日 第4回 R3 10月8日 第5回 R4 1月5日 第6回 R4 6月1日 第7回 R4 8月25日
国際分科会	世界における日本の学術の役割や、世界におけるわが国の学術をどのように進めていくべきかについて、若手科学者の立場から考える。既に関係の深い国際的若手学術組織であるGYAへの参画を通じ、他国の若手アカデミーとの交流を深め、また我が国との交流連携を深めるとともに、他国のアカデミーと共同して国際的発信を行う。	第1回 R3 2月15日 第2回 R3 3月24日 第3回 R3 12月10日 第4回 R4 12月28日予定

若手アカデミー活動報告

共同主催の国際会議

「第12回Global Young Academy総会・学会」

- 会期：2022年6月12日～17日
- 場所：九州大学椎木講堂及び
生物多様性保存ゾーン/オンライン
- テーマ：感性と理性のリバランス：包括性と持続性に向けた科学の再生
(Harmonising reason with sensibility: Regenerating science for an inclusive and sustainable future)
- 参加者数：791人 (80カ国)



科学的助言ワークショップ 「政策作成のための科学的助言：課題と今後の発展」



現地でメンターとしてグループワークに参加くださった先生方

メンター：Binyam Sisey Mendisu (Vice President of INGSA and GYA alumni, Ethiopia), Tateo Arimoto (GRIPS Japan and INGSA Board Member), Reiko Kuroda (Board member, INGSA-Asia), Yuval Vurgan (Knesset Research and Information Center), Mitsunobu Kano (Dean of Pharmacy Department, Okayama University), and Markus Prutsch (GYA member; European Parliament, Belgium)

Challenges:

- Misinformation through social media
- Science advice can be used with the wrong motive for political gain or for money making business.
- Scientists are not specialists in communication.
- The risk of using simpler language is, some information may be lost.
- Sometimes maybe most of the time we don't have a clear answer for policymakers.

Opportunities:

- bring the community members in the scientific discussion to make the implementation better
- Global collaboration is really important: the 'Global Young Academy' as a platform of improving science advice.
- Japan is starting to open grants and this could be a slow but steady solution.

プレナリーセッション1 「シチズンサイエンスを促進する社会システムの構築に向けて」

- 福岡大学を中心としたシチズンサイエンスの実装例の紹介とそのに向けた課題を議論した。

- **Lessons learned/ Best Practices of Fukuoka Projects**
 - Sometimes it is a challenge during dealing with 'Citizen Science'.
- **How to achieve mutual trust among citizen scientists and the society?**
 - There should be a common language to understand the issues of discussion
 - Accessible and understandable information are needed
- **What should we do that is harmonious for us? How we can identify citizen science is reflecting?**
 - General public need to know the limitation of science – what is uncertain, what is unknown. So that, they can understand the process of science. Reading scientific paper is a good way.
 - Professional researcher doing scientific research. Their communication, connection to community is needed.
- **How scientists should approach civil society?**
 - To start interdisciplinary discussion. People should know about stakeholders. Communication between stakeholders are needed. Science communicator can be helpful. Effective facilitation mechanism is needed. We need funding mechanism. We need to explore 'how to tackle social problems with the community'. Empowerment of the civil society is important.

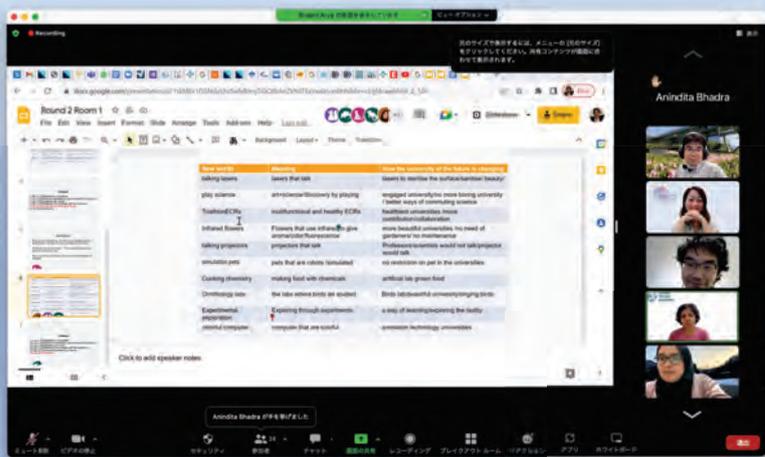
Machinaka Library (Reading spaces)



Citizens selecting books in a Book Sele

SFプロトタイピングを用いたワークショップ

全く関係ない2つの単語を組み合わせ、その意味を考える。未来の大学で使えるものは？



the university		Words related to your hobbies				
library	science-communication	reading	travelling	books	painting	drawing
books	garden	sports	crochet	theatre	dance	gardening
notebooks	common room	music	swimming	hiking	cycling	cooking
Virtual reality	AI	writing	TV series	board games	chess	socialising
dissection	blackboard	Movies	meditating	hiphop	Talking to people	wine-tasting
technology	science	Table tennis	pilates	fitness	yoga	aerobics

New words created by combining "words related to the university" and "words related to your hobbies"

rhythmic	Simulated-virtual-campus	virtual-reality-travelling	dance-talk	choreoleaching
virtual theatre	foodometrics	AI based audio books	tech-lock-tics	chesstistics
walkmeeting	cyclingscientist	dancescience	playscience	dancelingualogy
knitomatics	cpendrawinglabs	hikomapia	TriathlonECRs	
virtual canvas teaching	creative-socialising	diving labs	Happyscientist	musical seminars
hiphop-science-communication	researchorchestra	virtual gardening	dronotics	

- GYAメンバーの創造性溢れたアイデアが挙げられた
- GYAメンバーからも好評
- 成果は漫画にして公開予定



閉会式 Closing Ceremony

- ISC次期会長の小谷先生にご参加いただいた
- ISCがAffiliate memberとしてGYA/NYAを承認
- Statement案をメンバーに共有し、方向性の合意を行った（今後Statement発出、その漫画化を予定）



若手アカデミー活動報告

ライフワークバランス樹立に向けた取り組み

- 令和4年8月5日に日本学術会議が発出した『回答 研究力強化-特に大学等における研究環境改善の視点から-に関する審議について』にかかる審議において若手視点の情報収集や見解の取りまとめで協働した。

成事業」なども特定の大学・研究機関の一部の研究者が恩恵に預かっているにすぎない。その結果、一部の早熟な若手研究者が手厚い支援を重複して受給する一方、多くの若手研究者が置き去りにされている現状がある。特に任期付研究職に採用された若手研究者は比較的短期間で成果を上げる必要があるため、スタートアップ支援の遅れが大きなマイナス要因となりかねない。かつてない速度で縮小を始めた我が国の研究者人口を下支えするため、政府と大学・研究機関はスタートアップ支援の対象を「優れた若手研究者」ではなく、「新たに研究に参入する研究者全て」と再定義し、「芽を育む」精神をもってタイムリーな支援を実施する必要がある。

また、別の社会情勢の変化による影響の事例として、国際的なポストドク給与水準の差によって生じている課題が挙げられる。近年、JSPS 海外特別研究員制度の支給金額が、渡航先の国や大学・研究機関が設定する最低賃金水準を下回っているために渡航許可が得られない障害が発生している。具体的には、欧州原子核研究機構 (CERN、ジュネーブ)、マサチューセッツ工科大学 (MIT、マサチューセッツ)、スタンフォード (Stanford) 大学 (カリフォルニア) への渡航計画などである [24]。アメリカ国立衛生研究所 (NIH) の公表しているポストドク給与水準は、最低ランクであっても年間 54,840 米ドルに設定されている [25] のに対し、JSPS 海外特別研究員事業での滞在費・研究活動費は最大でも年間約 620 万円である [26]。国家間の賃金水準の差や為替相場などの社会情勢によって引き起こされる



若手アカデミー活動報告

公開シンポジウム

「那須地域から考える20年後の日本社会 共領域におけるイノベーション創出と地方創生」

2022年9月5日(月)14~17時

那須ハイランドパークイベント館

(栃木県那須郡那須町高久乙3375)

ナスコンバレーで展開されているイノベーション創出・地方創生の取り組みをナスコンバレー協議会の皆様にご発表頂き、若手アカデミーからは、イノベーションに向けた社会連携分科会の木村委員、地域活性化に向けた社会連携分科会の小野委員が、イノベーション人材育成における人材多様性の重要性、イノベーション創出と地方創生の関係性についてそれぞれ話題提供を行った。パネルディスカッションでは、地域活性化に向けた社会連携分科会の寺田委員のファシリテーションのもと、日本放送協会からゲストをお招きして、イノベーション創出と地方創生の関係性について、話題提供者の皆様と意見交換を行った。

那須地域が抱える社会課題の解決のために展開されている「ナスコンバレー」の取組を紹介し、地方創生について専門家を招いて議論



若手アカデミー活動報告

日本学術会議公開シンポジウム 「若手研究者をとりまく評価－ 調査結果報告と論点整理－」

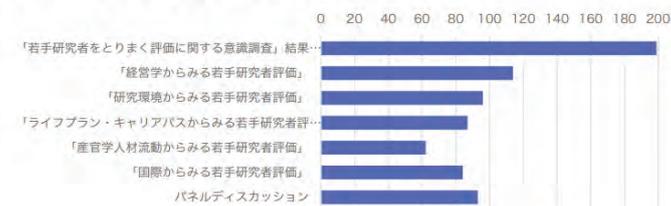
2022年10月6日 13:00-15:30

Zoom ウェビナー+Youtube ライブ配信



世界的な競争、評価をめぐる問題、キャリアパスに関する課題など、若手研究者をめぐる研究・知識生産の環境は多くの課題を抱えている。安定的な活動基盤の獲得のために、時にチャレンジングな研究の回避、あるいは評価指標を過度に気にした活動などの弊害が指摘され、知識生産の可能性を損ねていくことが危惧されている。日本学術会議若手アカデミーでは、2022年6月から7月にかけて「若手研究者をとりまく評価に関する意識調査」(Webアンケート)を実施し、全国の8000人を超える若手研究者に回答いただいた。本シンポジウムでは意識調査の結果を報告し、若手研究者をめぐる評価のあり方について幅広い視点から議論し、知識生産をめぐるより良いエコシステムの形成に向けた論点整理を行った。

6. 関心のあった内容を選んでください(複数選択可)。

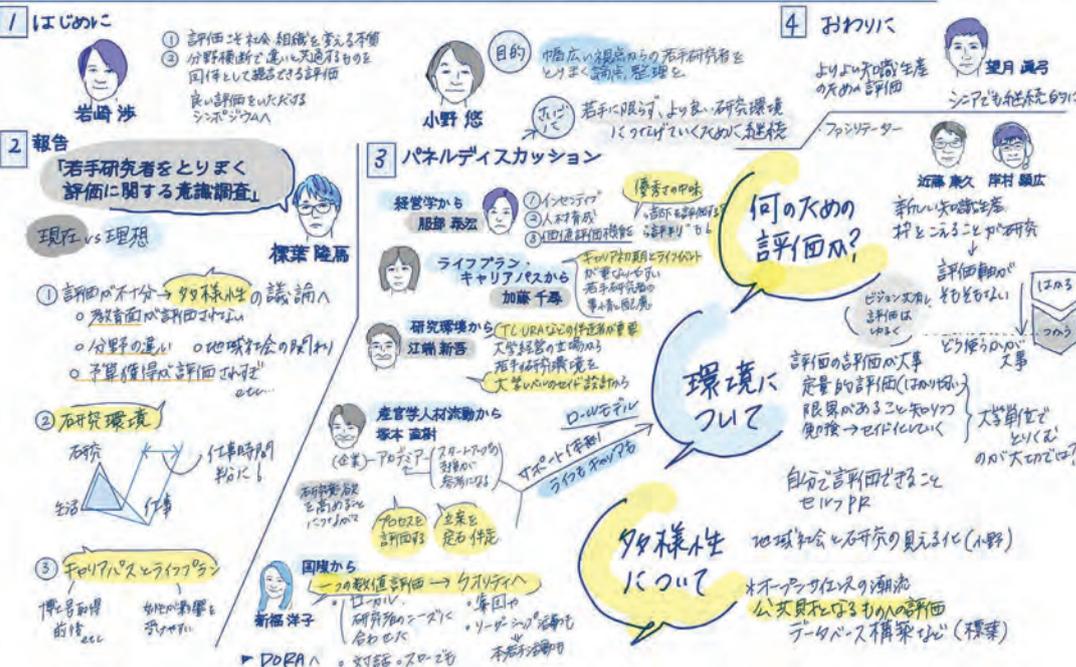


若手アカデミー活動報告

日本学術会議公開シンポジウム

「若手研究者をとりまく評価－調査結果報告と論点整理」

2022.10/6
13:00~
15:30



参加人数：
627名
(ウェビナー584名+Youtube
ライブ配信43名)
YouTubeアーカイブ再生回数：
868 回視聴

シンポジウムのアンケート

- アンケート回答数：256件
- 20~40代が66%
- 大学等研究職58%、その他、大学専門職、大学事務職、企業など
- 「非常に満足」「やや満足」が合わせて77%

若手アカデミー活動報告

日本学術会議公開シンポジウム

「若手研究者をとりまく評価-調査結果報告と論点整理-」

- ・ シンポジウムに参加した理由
アンケートに回答したから
自身のキャリアパスについて考えたかったから
自身を取り巻く状況が知りたかったから
教員個人評価の業務を担当しているため
適正な評価の方法、あり方が知りたかった
若い研究者の考えを知るため
若手研究者の置かれている状況を把握するため
若手研究者を育成する仕事に携わっているため

- ・ もっと掘り下げてほしい内容
多様な評価と負担軽減の両立
評価の透明性・公平性
シニア研究者や官僚がこうした問題をどのように捉えているのか
研究者評価が組織でどのように利用されているのか
大学の組織としての評価と、研究者個人としての評価をどのように切り分けて考えるか
ライフイベントとキャリアについて
メンターやURAによる伴走型支援

若手アカデミー活動報告

サイエンスアゴラ2022のオンライン企画 シンポジウム

世界科学フォーラム in ケープタウン：社会正義と未来への科学

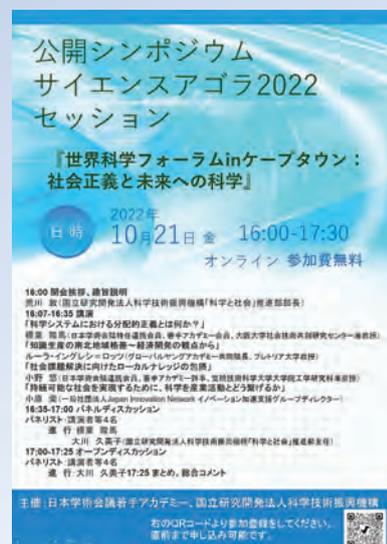
World Science Forum in Cape Town: Social justice and the science for the future?

10月21日(金) 16:00~17:30

共同主催：JST、日本学術会議若手アカデミー、

後援：駐日南アフリカ大使館、駐日ハンガリー大使館

JSTと共催で、科学政策に関する主要な国際議論の場となっている世界科学フォーラム（WSF）にむけて、科学とグローバルな公益の関係について、一般市民を交えたサイエンスアゴラのシンポジウムにより議論を深めた。



若手アカデミー活動報告

2022年3月 アジア学術会議（安田会員）

「Science, technology and society for SDGs」において議長を務め、アジアにおける様々な分野や国横断的なSDGsの推進例について議論した。

2022年9月 第77回国連総会サイエンスサミット（新福会員）

“Young and Global – A perspective on today’s challenges in science”に登壇



2022年10月 EU-Japan Science Policy Forum（新福会員）

New Approaches to Research and Innovation in a Changing Worldに登壇

若手アカデミー活動報告

2022年11月

インターアカデミーパートナーシップ(IAP総会)（新福会員）

「Science Advice by Young Academies on Critical Issues: Why does it matter?」に登壇

インターアカデミーパートナーシップ若手科学者会議（安田会員）

「Worldwide meeting of Young Academies session 2」

各国の若手アカデミーの持っている共通の課題や特に科学の世界における南北問題の解消と有事の時の共同研究について議論した。



若手アカデミー活動報告

農林水産省との連携によるYouTube発信



視聴回数2.7万回、2.3万回、3千回以上

若手アカデミー活動報告

アカデミックインターン 実施期間：2022年5月22日～7月30日

趣旨：地域活性化に向けた社会連携分科会として、大学と、隣接地域の高校生を結びつけるインターンシップを「システム化」する。大学個別のアカデミックインターンの取り組みは既に複数あるが、行政・大学・高校の三者が「キャリア教育」という目的のためにアカデミックインターンを定期的に実施するシステムは存在しない。まず必要なのは実績であり、神戸大学と附属高校で実施し、課題を洗い出す。

実施内容：分科会メンバーの高田知実、高槻泰郎の両名（いずれも神戸大学）が、神戸大学附属中等教育学校4回生（高校1年生）から希望者を募り、2022年度より、高校の学習指導要領に投資信託を含む資産形成が盛り込まれたことを踏まえ、「金融リテラシー教育」のための高校生向け教科書を高校生自身のアイデアによって作るという内容のインターンを募集。

※キャリア教育は、平成11年12月中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」において初めて言及された概念。大学を選択することを目的化するのではなく、大学等の卒業後において、社会的自立、職業的自立ができるよう、主体的に進路を決定する能力・態度を育成するキャリア教育を進めることを重視。特に大学等への進学者が多い普通科においては、喫緊の課題であり、インターンシップ等を実施することは、生徒に自己の将来について考えさせるとともに、社会や職業に対する認識を深め、学ぶことの重要性を考えさせる上で極めて有効である。

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/06122007/001.htm
(2022/11/24閲覧)

若手アカデミー活動報告

アカデミックインターン 実施期間：2022年5月22日～7月30日

参加した学生からのフィードバック →負担くやりがい・達成感

- 自分達で教科書を作るという普段しないことを体験できてとてもよかった。教科書の内容が金融ということで普段触れない分野だったのでよかった。
- かなり頑張ってクオリティの高いものができたかなと思います。期間が長くてもみんなでやればなんとか出来上がるものだと思います。
- 先生方のお話を聞いてそれで終わりではなく、自分たちでテキストを作ることで学びを深められたと思うし、非常にやりがいのあるものだった。
- 高校生向けの教科書を作るということで、学んだことをさらにかみ砕いて説明するために理解を深めることができました。歴史班を選んだことで、先物取引など自分の知らない領域についても学ぶことができ、貴重な経験ができました。
- 実際に大学に行き、お話を聞かせていただいたり、私たちオリジナルの高校生向けのテキストを作成させていただいたり、KUトライアルでしかできないような貴重な経験をさせていただきありがとうございました。また、メンバーとはよりよいものを作るにはどうすればよいかなどたくさん話し合いを重ねることでこれまでよりも仲を深めることができましたと感じています。テキスト作りでは初めてのことで大変だと感じたこともありましたが、達成感をとても感じられました。
- 楽しかったし、非常に勉強になった。色々な人から褒められて嬉しかった。
- 自分でしっかり理解しなければテキストを作ることができないため、金融について理解度がすごく上がりました。とても楽しかったです。

若手アカデミー活動報告

アカデミックインターン 実施期間：2022年5月22日～7月30日

<今後に向けた課題>

- 今回の取り組みは神戸大学と、その附属校による閉じた企画、かつ属人的であり、これを他の大学、高校に広げ、恒常的な仕組みとすることが必要。
- 多様な分野のアカデミックインターンとして展開すべく、まずは神戸大学とKIITO (<https://kiito.jp>) との連携という形で、高田・高槻が調整を進めている（現在進行形）
 - KIITO：神戸市が運営資金のほとんどを拠出して運営するデザインの拠点。昨年度より子供の創造的活動や学びを支援する機会を提供する「KIITO:300」というプロジェクトが始動。

若手アカデミー活動予定

世界科学フォーラム 2022年12月8日 南アフリカ ケープタウン

THEMATIC SESSION III/A ECOSYSTEM TO ENHANCE GLOBAL PUBLIC GOOD WITH SCIENCE: DISTRIBUTIVE JUSTICE AND WELL-BEING AS KEY CONCEPTS

標葉会員、近藤会員らが、日本学術会議、JSTと共催で、科学政策に関する主要な国際議論の場となっている世界科学フォーラム (WSF) においてテーマ別セッションを共催し、科学とグローバルな公益の関係について議論を深める予定



DAY
Thursday / 8 DEC
11:30 - 13:00

Thematic session:
THEMATIC SESSION III/A ECOSYSTEM TO ENHANCE GLOBAL PUBLIC GOOD WITH SCIENCE: DISTRIBUTIVE JUSTICE AND WELL-BEING AS KEY CONCEPTS

Organized by: Japan Science and Technology Agency (JST), Young Academy of Japan (YAJ), Science Council of Japan (SCJ)

Abstract: In the 2019 World Science Forum's Declaration called for concerted action on 'science for global well-being', in the context of longstanding social inequalities tackled by the Sustainable Development Goals, addressing challenges to humankind's basic existence under COP26, or the world-shattering impacts of the Covid-19 pandemic, few in 2019 could have foreseen how meaningful their call to arms has now become. Under the current situation, "well-being" has been an essential perspective to understand the role of scientific knowledge and its impact on society. To consider the relationship between well-being and advanced knowledge, we need to focus on another key concept "distributive justice". Distributive justice is a key concept for current scientific systems to overcome inequality of accessibility, benefits, and risks of scientific results in international policies and scientific communities. What role can science play in the current emerging issue of inequalities in the distribution of knowledge resulting in social injustice? The objective of the panel is to explore deep understanding of multi-layered gaps on knowledge production and impacts of concepts of "well-being" and "distributive justice". To tackle this theme, we will focus on the lessons learned from our research and practices. And then, we will discuss questions on "What kinds of policies, activities, and communications can solve those gaps and bring an inclusive ecosystem of science?" Furthermore, speakers will assess the role of STI and international diplomacy in both creating and tackling the very conditions that have made our science for social justice problems so manifest. Following an interactive debate with delegates, recommendations will be made to inform the 2022 World Science Forum's Declaration. These will target how diverse stakeholders across sectors and importantly, national borders, from top scientists and policymakers to youth and the aged, can be better engaged to drive meaningful change and bring distributive justice and well-being one step closer.

Moderator:

- Mabasa Eudy, Science Counsellor to the European Union, Department of Science and Innovation, Government of South Africa

Speakers:

- Ryuma Shinoha, Associate Professor, Research Center on Ethical, Legal, and Social Issues, Osaka University / Member, Young Academy of Japan, Science Council of Japan
- Yashuhisa Kondo, Associate Professor, Research Institute for Humanity and Nature (RIHN) / Member, Young Academy of Japan, Science Council of Japan
- Marell Claessens, Associate research professor, University of Namibia
- Romjen Kosalkanort, Centre Director, Southeast Asian Ministers of Education Organization Regional Centre for Higher Education and Development (SEAMEO RIHED)
- Mayumi Ishizuka, Professor, Hokkaido University

若手アカデミー活動予定

- 2023年 G7サイエンス学術会議

2023年に日本が議長国となるG7サイエンス学術会議にむけ、3つのテーマ（気候変動について森章会員、高齢化社会について山田会員、海洋と生物多様性について安田会員）それぞれに1名ずつ若手アカデミーから執筆メンバーが選出され、共同声明文の作成を行っている。

第25期若手アカデミー ビジョン・ミッション

20年後の科学・学術と社会を見据えたリモデリング戦略を考える

- 研究者コミュニティのみならず政府・産業界・メディア・国民や諸外国の若手アカデミーとも対話・連携することで、世界や日本が直面する諸問題、また、若手研究者をとりまく諸問題に関する解決策を提示し、実行していく
- 多様な観点から分科会活動を行うとともに、幅広い専門性からの知見を集約することで、20年後の科学・学術と社会を見据えた「リモデリング戦略」を提示する

25期の中に各分科会からの意見をまとめた意思の表出

「2040年の科学・学術と社会を見据えて取り組むべき課題～人材、業界、越境、国際、地域、革新～」を行う予定

どうぞ、よろしくお願いいたします。

